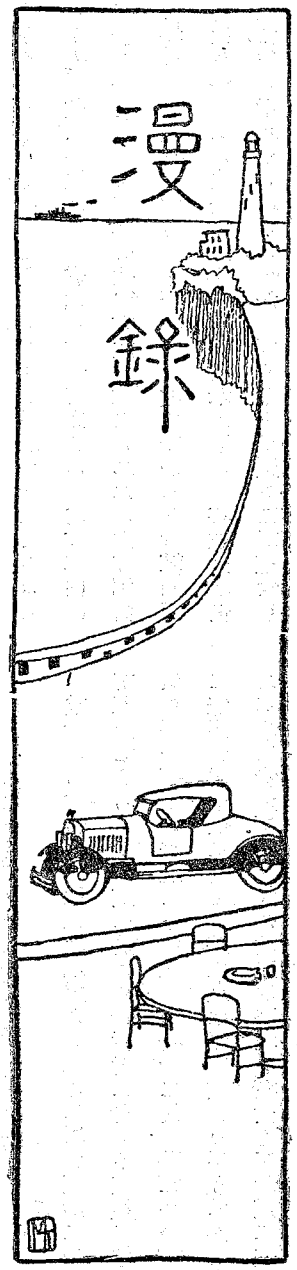

小さき詰石〔二〕

鯉城生

春といへばまづまたれぬる心より
　ちり來る雪を花とこそ見れ

東京のお天道樣は今年は馬鹿にご機嫌が宜い、元日以來まだ半日の降雨すらない好晴の日和續きだ。いや雨脚の遠い此頃の樣子ではひよつとすると日比谷座の劣惡喧囂の醜態に聊か愛想つかしをしたのかも知れない。それにしても命の親とも賴む井戸の水まで渴らし、法雨の御祈禱とまで騷ぐ市民にいつか一寸冷い眼目を呉れてチラッと白い脛を見せたきり、今に情の露一雫落して下さらぬとはあまりにつれなさ過きる。郊外者には例年の雪解道の歩き難さや

凍雨の冷たさこそないが、乾燥しきつた寒風に喉は痛み、干乾びた鋪道に響く足駄の甲高い音と、微風にさへ舞ひ立つ細かい砂塵に氣がイラ〳〵して、立春の聲だけでもう堪らなく夢の様な春が戀しく、この歌の如うに花が待たれる。が花咲爺でもなければ龍田姫でもない私には、此誌上にさへ花を咲かせ錦を織りなす程の力はない。相も變らず首を竦めて水氣のない砂上に雜草の種子を播き續ける。

▽　△

内務省玄關の正面に大時計が悠然と、でも後れるようなことはなく霜の朝も風の夕も撓まず倦まずチツクタツクとタイムを刻んでゐる、恰も廳員の登廳ぶりを監視でもして居る如くに直立不動の姿勢を保つて。だが先生極めて無表情で大臣の登廳を迎へても眉一つ別に動かすでもなければ陳情員が隊伍を組んで押しかけても聲高に喚き立てるでもない。それで居て彼は決して自己の本務を忘れて居るのではない。時々ソッと廊下の人を見下して、或人には未だ大丈夫ですと宥めたり或る人をば早く〳〵と急き立てる。

平日この時計の午前十時前後時としては二三十分も過ぎた頃この大玄關に登場する中肉中脊の血色の好い——毬栗頭は帽子に隱れて見えない——四十がらみの男がある。大時計を尻目にかけるでもなく、落ちついた物腰でサッサと入つて土木局の廊下から道路課の室に消え込む。此人こそ時々異動のある道路課長よりも却つて土木局に其人ありと斯界に鳴の響いて居る土木事務官田中好氏である。——私は先に人物月旦を主とするものでないことを斷はつておいたが、大正六年以來專ら道路行政に携はり多大の貢獻をなして居る道路課の主(ヌシ)である氏を殘して筆を進ますわけには行かない暫く筆の走るに任せよう——氏が平常幾分出勤の遲いことは衆知の事實で茲に特筆大書するにも及ばないが又敢て秘しだてする必要もない。遲いと云つても高々三十分そこいらだが、これは氏の勤務振りを少しでも傷けるものではない、氏の缺點ではなくて寧ろ特徴なのである、といふと知らぬ人は詭辯を弄する如うにとられるかも知れな

いが、以下私の述べる事實に依つてこれが氏の勝れたる性格の一つの顯れであることを了解せられるであらう。

▽　△

一度でも役所に氏を訪ねたことのある人は、氏の前に書類の山積されてゐるのを見たであらう、そしてムッツリとして頻りに書類を調べて居るか、でなければ必ずペンを紙片に走らせて居る氏を目擊したであらう。初對面の人なら恐らく其面前に佇立して暫く挨拶の口を切るのに躊躇したであらう、それ程忙がしく絕えずコツ〳〵と何事かを行つてゐる。若し煙草――煙草と云へば敷島の三個位は毎日烟に吹いてしまう――を銜へてボンヤリして居ることがあれば、その靜かに搖ぐ淡青い烟の中には目に見えぬ電子が縱横無盡に活躍して居るものと觀れば間違ひはない。遠慮深い陣情員は鞠躬如として衷情を訴へ事情御憫察を請ふて早速罷り下るのであるが、厚かましいのになると遠く海山越えて態々上京したのだからと、み腰を据へて羊腸のそれの如く說き立て問ひ返し、バタから見て居てイラ〳〵する程落ち着いて邪魔をするのもある。こんな人が一日に何人かは必ず訪ねて來る。地方廳から用務を帶びて來た人の多くは一應の質問と說明とを試みる、局長のベルが鳴る、課長がお呼びですと給仕の使者がたつ、とても時間中の多忙さつたら、三面六臂の痲利支天でも一汗かく程の活動振り。

書類の多い道路課では、氏が書類の山を崩しては判を押し〳〵しても複屬官連が後から〳〵と氏の机上に峯を築く、一峯二峯三峯と、また其の一角から壞してはサッサと目を通して、オイこれを出したと片附けて行くのであるが、其の間に在つてどんな厚い書類でも肝心要めな點は決して見逃しつこない。△△君これはと反問し再調査を命ずる、平素その烱眼には恐れを爲して居る連中だ、決して夢忽かに調査して居るのではないが、それが事實の調査であろうと法理論であらうとこの場合立所に辯明立證し得る場合は甚だ稀だ、法律論では新知識として多少の自信を以て臨む見習ひ法學士も氏に對するときは大に自信を傷けようとい

ふもの。この外氏は稍重要な問題になると悉く自ら案を練り稿を草し而も立所に成るから驚く。下世話に好きこそ物の上手なれといふが、氏は嘗て地方聽在任當時から土木行政に携はり、大正六年内務省に轉任地方局勤務となつたが、當時の舊慣墨守主義が氏の氣風に合はう筈はなく、血氣に任せて書類の處理方法や法律論で屢々先輩と睦み合ひ、地方局は心に染まぬと自ら運動して僅か二三ヶ月で土木局に轉じた程土木事務が性に合ひ、爾來今日に及んだわけで土木行政に關する事務的手腕は凄いものだ。此間には我國道路行政に一新紀元を劃した道路法の制定があり、次で國道府縣道の基本的改良計畫が創始され、更に軌道法が制定せられる等重大な案件の解決されたものが多い、之等に關し氏の獻策が與つて力のあつたことは勿論終始よく局課長の片腕となり之を佐けて其の完成に盡したるの功は甚だ大であるが、未だ氏の功過を決算するの時期ではないから茲には詳述を避けることゝとする。

こんなことは私が事新しくこゝに紹介するにも及ぶまい。其の蘊蓄は凝つて土木行政となつて既に公にされ世に顯れて居り本誌毎號の所論は氏の博識達見を更に裏書きして居る。人は氏を文才ありと評して居るが文才丈ではあんなに書けるものではない、更に不斷の研鑽努力と其の達識とに因るのである。併し之等の素質は自然いくらか氏を議論好きにした傾向がある。其の修練の結果は丁度大菩薩峠中の人物机龍之助の音なしの構への如うに、其の型を見極めないで不用意に氏に切りつけようものなら誰でも一たまりもなくスパリとやられる。

議論の好きなことゝ喧嘩好きとは異ふ、議論は常に條理を基礎とし正々堂々軌道上の爭ひであるが、喧嘩は條理を逸脱した軌道外での邪道に陷つた我執の爭ひである。それに世には氏を多分に鬪爭性を有する人物の如くに考へて居る人があるようだ。それは氏が常に條理を重んじ幾分議論好きに見えるのと、本誌毎號所論を辯目で見ることに基因するので、之等の人々は唯に氏を解しないといふばかりでなく、徒らに他に追從讓歩する安價な妥協を美德とする似

非道學者流か、否らざれば自らの偏狹を忘れた自己擁護者である。氏は決して螳螂のように向ふ見ずに、觸れば折れそうな斧を振上げて反抗したり、相手かまはず萬力のような大鋏を擔ぎあげて喧嘩をしかける蟹見たいな態度で、物好きに筆舌を弄して論戰するものではない。土木行政特に道路行政官でこそあれ、道路行政の天地にのみ跼蹐して葭の髓から天を窺くような狹い量見で居る人でないことは、氏が河川港灣鐵道等諸般の交通政策交通經濟等の方面にも造詣が深く、殊に平素交通行政を統一所管する所の交通省設置論者である一事でも判るではないか。

氏は常に國民經濟の隆昌發展と、國民生活の向上安定とに專念し之に立脚して、苟も之を無視する態度に出る者をば、國民經濟の振興を阻み國民生活を脅かすものであるとして、之が矯正排除に努めて居る、從て若し誰でもこの信念に基き之を經緯とした道路政策なり道路行政の基本的領域に侵入して、其の經緯を紊し進路を妨げる者があれば、國家の爲又自衞の爲に當面の敵として之を驅逐し其の行動を遮り、以て制度の秩序を保ち、各其の本然の立場に於て離れず觸れず安んじて、夫れ〳〵自由に特性を發揮して、完全に其の職責を盡し窮極の目的に到達しようとする外に他念はないのだ。是迄の事例を於ても總て受動的で已むを得ざるの態度である。田舍道を歩く時道の中に食み出て往來の邪魔をする茨があれば、枝打ちするに强いて道路管理者の許諾を得るにも及ぶまい、うるさくしがみつく裾の藪じらみを拂ふに誰に遠慮がいろう、いくら悟つたとて憐み深く自分の身體に蝨を飼つた僧良寛の態度は餘り感心したものではない。相手の非違を見ながら敢て節を屈して敵門に降るは、謙讓の德ではなくて小人懦夫の行ひである。世には自官廳の權限の擴張を欲する餘り、所謂公的私心の誘惑に依つて所管爭ひを爲す者が無いではない。けれども私は世の注目を惹いた從來の問題、例へば自動車道路問題自動車營業問題等に對する氏の態度は、決して斯かる不純な動機に因るものでなく道路の本質的作用に鑑み自動車の機能並に他の交通機關との相關關係に稽へ寧ろかゝる爭議を

忌避し之を是正せんが爲に、其の信ずる所を公にして識者の批判を仰いだ公人としても極めて眞面目な態度であり、私人としては男性的な痛快事として之を是認するものである。

▽　△

序でに今少し氏の日常生活の様子を窺つて見ることゝしよう、氏は毎日役所から自宅に歸ると晩酌を樂しむ、二合入のお銚子を二本ばかり轉ばしお腹が程よく充たされると自分も亦横になり――若い時には食後でも直に机に向つたものだが年の勢で今はそうはいかぬと見える――ぐつすりと前後不覺に夜明まで一眠りかと思ふと、凡そ二時間時には三四時間も經つた頃ムツクリと起き上り、庭の椿の花一輪ポタリと落ちても淑默(シジマ)を破つて硝子戸越しに聞えるような靜かな夜半、獨り讀書研究に耽る、或は著述や雜誌の原稿にペンを走らせ、公務の爲に草案を練る、そしてグツと冷い奴を一杯ひつかけて再び寢に就くのは大抵朝の三四時頃、自然朝の出勤は幾分遲れようといふもの、それでゐて途中電車の中で一日の計を樹てるものか、例の歩調で登廳オーバを釘に引懸けると早速△△君何の書類を探し出して呉れ給へ、それから××君何はどうなつて居るかねそして序でにこういふことを調べて見て呉れ給へといふ調子、それの無い場合には、今朝は寒いナアと云ひながら餘りスチームに暖まりもしないで机に向つてセツセと罫紙にペンを走らせ又は書類の山を壞しにかゝる。此の間氏の私的生活中には多くの公事務が無遠慮に幅を利かしてゐる、勤務時間中に私生活を豐かに織込む徒輩とは自ら選を異にする。

全く氏は道路の精ではあるまいかと疑はれる程道路行政に忠實熱心である、而もどんな多忙にでもどんな困難にでも耐へ、却つて之を征服することに興味を持つて居るかの如く自ら仕事を考へ出し背負ひ込む、丁度道路が昔は單に人ばかり次で俥を載せて居たのが、漸次馬車電車等を運ぶようになり、更に自動車や軍用タンク迄も平氣で走らすに至つたのと相似て、其の負擔力の大なるに驚かざるを得な

い。

▽　△

これで見ると其の日常には寸隙もないようであるが、英雄閑日月ありで役所でも時たまイヤーどうぢやエライ部屋が明るくなつたナーなんてやつて來る連中があつて、五分や十分は與太が飛ぶ、日曜祭日等には時たま庭いぢりに半日を暮すこともある。此外多少の隱し藝や道樂もないことはない。氏が唯の十メートルでも走つたのを見たことが無い程此頃流行のスポーツ等には無趣味沒交渉だが、あれで冬休暇に歸省した時には銃を擔いで獵に出かけることがある。嘗て獵師に逐ひ出された大鹿を仕止めたことがあるが、元よりオツカナビツクリで擊つたマグレ當りのことだ、鹿の胴腹を射貫いて大切な皮を損ねたので獵師から散々に小言を言はれ大しよげに悄氣たそうだ、其後も行く度毎に谿峽ひの待ち伏せの意屈紛れに煙草を吹かせて居て取り逃したり、折角鹿が眼前に飛び出して來ても角打振つた其の凄じい勢に怖氣づいて仕損じたりして何時も獵師から小言を喰ふので、此頃ではとんとはずまなくなつたそうだ。川獵には大分得意で田舍では網をよくし、自然魚の料理は手に入つたものだ、水には緣があると見えて丹波の山奥生れではあるが、海に落ちても三町や五町は波を切る丈の水泳の心得はある。だがまあ世間竝には無藝の方だろう、碁將棋等まだるつこい勝負事は大嫌ひ、球も撞かねばゴルフもやらず、さりとて謠曲一つ唸るでもない、其んな暇があれば書物の一頁も讀み兎角催促され勝な原稿の五頁も書かうと云ふ方。酒は其の表藝の方で、氏の未だ若い頃の事某局長に隨行してK市を夜汽車で立つのに、時間眞際まで局長の大向ふを張つて健か痛飲して大切な書類を宿に置き忘れお目玉を頂戴したといふ逸話を有する程の豪の者である。而も酒に依つて氏の智襄は愈充實されるようにさへ見える、でも文化十二年十月二十一日千住宿一丁目に住んで居た中屋六右衞門といふ者が、六十の年賀に其家で酒の呑み競べしたことがあるが、その酒戰に參加した者二十名

中、松勘といふ男は五合盛の嚴島杯七合盛の鎌倉杯九合盛の江島杯一升五合盛の天壽無量杯二升五合の綠毛龜三升の丹頂鶴等で一通り苦もなく呑み干したそうだが、氏が松勘の敵でないことは勿論、遺憾ながらこの座中の一人江島杯から始めて綠毛龜に至るまで五杯を呑み盡し唯丹頂鶴を一つ殘したといふ會津の旅人河田にも脊を見せて逃げねばなるまい、殊に大正十四年春山梨縣土木課長渡邊氏が東京に出張中腦溢血で知友に一言の挨拶も得せず客死し、海歸來の新聞廣告が目に著くようになつてから玆二三年はメツキリ酒量が減つた、と云つても自宅に心安の來客があると主客の間に銚子の五本七本立つまでには大した時間はかゝらぬ、どんな底拔の宴席でも嘗て前後不覺に陷つたためしはなく、翌朝は何時もの通りチャンと出勤する所は未だ頼もしい、但し當日はオイお茶を呉れ給への連發に給仕は聊か忙しい。享和年中の人田宮仲宣は其の著東牖子に「酒を飲て面色赤くなるものは心の微なるものなり色の青くなるものは肝の微なるもの也故色赤くなるものは酒力心の臓を助くる故豁達となつて物に悅び面色の青くなる者は酒力を肝の臓に借す故怒を發し元來謀慮の官なる肝を悍かすゆへいろ〳〵理屈を云也云々」と云つてゐるが、氏も亦酒を飲みて面色赤くなる方で酒力心の臓を助くる勢か、飲むに從つて氣愈豁達となり飲み且歌ふ其興極まるや遂に起つて「朝の六時からカンテラ提げて、鑛山通ひのヨードント、親の罰」を踊る。氏は酒の豐淳な味を娛しむ、けれども更に酒の氣分を樂しむだから酒中に策を廻らし款を通ずと云つた風な、宴裏に特別な蟠りのある陰暗な酒肴は少しも氏の酒興を唆らぬ。氏の酒は全く朝日に匂ふ山櫻花の樣なのだ。

氏にはも一つ良い道樂がある、人の世話好きがそれだ、推薦者が信用の置ける人だつたら骨折つて何處かに塡め込む、氏のお世話になつた而も恐らく氏が其名をさへ覺えてないような人が、北海道から沖繩迄の間に尠からず散在し活動して居ることだろう。この性質はやがて俠氣となつて氏の性格の特徴ある部分を成して居る、從つて部下を可愛がること一通りでない。元より明敏な頭と腕の持主、部下

の仕事ぶりが間怠しく相當口やかましくはあるが、盛夏の雷雨のようなもので一瞬の後は光風霽月、だから惡感など抱く者は一人も無く、先輩といふよりも親分に對する樣な氣持で課員一同推服して居る。

口やかましいと云へばそうだ此處數年前まではいくらか氣短かであつた、性來豪放磊落で相手が誰であろうと思ひ通りに振舞ひ云ひ度い放題言ひ異議があれば反對もすれば議論も鬪はす、今でもそれに變りはないが、以前は議論の時などどこか赤い唐辛を想はせるような風格がほの見えたものだが、此頃ではすつかり圓熟大成して何處で誰に對する時でも、雁次郎の大星由良之助、尾上菊五郎の夢の市藏のように、言語態度ピツタリ塡りそぐふて少しの嫌味もなく落ちついて見え、議論の時でも刃物のような皮肉をつつ走らせながらもあの氣持の良い哄笑を交へて相手の鋭鋒をそらす丈の餘裕が具はつた。

▽　△

昔名優阪田藤十郎は、大阪の芝居へ勤める折には態々京の賀茂川の水を樽詰にして送らせた。それは俳人や數奇者がお茶の水の品を吟味するのとは異つて、芝居に出て居るうちは自分の身體は銀主方と見物衆のもので、自分獨りのものではない、だから日頃飲みつけない水を飲んでお腹を壞しでもしたら申譯ないとの心遣ひからであつたそうだ。田中さんよ、今貴方の身體はあなた個人のものではない。得難い名課長の丹羽氏はそう何時までも無理留する譯にはいかぬ、そして次の人がどんなに優れた方でも直に道路課の名課長になることは又困難である、貴方が道路課に居らるればこそ去る人も來る人も、後顧の憂なくして去り不安氣なく來ることが出來ようといふものだ。あなたも有り難迷惑かも知れない、でも貴方は幾らでも優遇され得る榮達の迎駕を自ら悉く却けて、好んで原位置に留まり、興味を以て道路行政に勤しみ勵み、愛兒を哺育するように道路の生長を樂しみ、這へば立て、立てば歩めの親心を以て道路政策の完成を祈り、地方の開發產業の發展を助け促して居

るのだから、そして今や二男坊の産業道路費も生れ出ようとして居るのだから、元氣に任せて無理をせぬよう、自重自愛國家の爲に此上の御盡瘁を願ひ度い。

老婆心の强い私は最後に今一言申上て置き度い。松の樹にはお酒が良い藥だと云はれて居るが、私の聞く所によると、觀音經の中の「澍甘露法雨、滅除煩惱焰」といふ文句を紙片に認めてそつと樹の根に埋めて置くと、枯れかけた松の綠が急に靑々と生氣を取り返すそうです。お宅の庭の松の樹が萎みかけても、この靈驗あらたかな祕傳を行つてさへ置けば、決して灘送りの物體ない御酒など注ぎかける必要はないが、其の御酒も御身體の爲少々節するようにお心懸けになつて、其代り偶には讀書の暇にお座敷で若やいだ松を眺めながら、お嫌ひではない筈のお茶でも入れて、心長閑に玉露の雫を舌の上で味はつて御覽成さい。お茶を頂いて居ると、其の色其香其の味が一つになつて舌觸りの云ひ知れぬ心よさ、同時に初冬の候あの白い花を抱いたお茶の灌木の生活の閑寂さが身に染み心に溶けて、一種特別な心境に安らぐことが出來ます。俗塵を離れた淸澄なこの氣分で讀書成されば、黄金色の稻穗の實る秋の夜、大空高く澄みわたる月のように圓(マド)かにハッキリと貴方の心鏡に徹するでせう。そうすれば海歸來の準備も不用となり、本來松の樹のように頑健な貴方は其の常綠の葉と共に、何時迄も健かな生氣を保たれ、永久に我國道路行政の爲に盡して頂けるでせう。呉れ〴〵も自愛自重をお祈りして筆を擱きます。(二月十七日)